

経営の基底

1 北海道教育の基本理念・教育推進計画3柱22施策（R5～R9）

北海道教育の基本理念

自立

北の大地で世界をみつめ、自立の精神にあふれ、自らの夢に挑戦し、実現していく人

共生

ふるさとへの誇りと愛着をもち、これからの社会に貢献し、共に支えある人

施策の柱 1 子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進

- 施策 1 SDGs・ESDの推進
- 施策 2 幼児教育の充実
- 施策 3 新しい時代に必要となる資質・能力の育成（小・中学校）
- 施策 4 新しい時代に必要となる資質・能力の育成（高等学校）
- 施策 5 特別支援教育の推進
- 施策 6 STEAM教育の推進
- 施策 7 キャリア教育の充実
- 施策 8 体力・運動能力の向上
- 施策 9 健康教育・食育の充実
- 施策10 道徳教育の充実
- 施策11 ふるさと教育の充実
- 施策12 グローバル人材の育成

施策の柱 2 学びの機会を保障し質を高める環境の確立

- 施策13 ICTの活用推進
- 施策14 いじめ防止の取組の充実
- 施策15 不登校児童生徒への支援の充実
- 施策16 教員の養成・採用・研修の一体的な改革の推進
- 施策17 働き方改革の推進
- 施策18 学びのセーフティネットの構築

施策の柱 3 地域と歩む持続可能な教育の実現

- 施策19 地域と学校の連携・協働の推進
- 施策20 生涯学習・社会教育の振興
- 施策21 安全・安心な教育環境の構築
- 施策22 芸術文化活動の推進

2 オホーツク管内教育推進の重点

北海道教育庁オホーツク教育局（令和8年4月）

基本理念： 自立・共生

テーマ： 教員の専門性向上と学び続ける組織づくり

～子どもと教職員の Well-being の実現を目指して～

01 子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進

- **新しい時代に必要となる資質・能力の育成**
 - 小・中学校においては、自分の考えを「具体的に書くこと」を取り入れた活動等を推進する。
 - 高等学校においては、探究的な学習を推進する。
 - 1人1台端末を利活用した学習活動の充実を図る。
- **特別支援教育の充実**
 - 適切な学びの場を提供し、教職員の専門性の向上を図る。

02 学びの機会を保障し質を高める環境の確立

- **いじめ防止の取組や不登校児童生徒への支援の充実**
 - 「いじめ見逃しゼロ」と解消に向けた組織的対応を強化する。
 - 「不登校により学びや支援にアクセスできない子どもたちをゼロ」を目指した環境整備を行う。
- **働き方改革の推進**
 - ICTの活用による校務の効率化を進める。
 - 事務職員の校務運営への参画を促進する。

03 地域と歩む持続可能な教育の実現

- **地域と学校の連携・協働の推進**
 - 小・中学校においては、熟議に基づく学校運営協議会の機能を強化する。
 - 高等学校および特別支援学校においては、地域と連携・協働した魅力ある学校づくりを推進する。
 - 市町村における部活動の地域展開を進める。
- **安全・安心な教育環境の構築**
 - 危機管理マニュアルの見直しを行う。

3 佐呂間町教育教育行政執行方針

1 基本理念：「3つの未来シコウ」の実践元年

変化の激しい時代において、前例踏襲ではない「思い描き、挑み、実現する」教育行政を目指し、以下の3つの視点を指針とします。

- **未来思考 (Think)：** 0歳から18歳までの育ちを俯瞰し、学びを論理的・体系的に「つなぐ」。
- **未来試行 (Try)：** ICTや新技術を恐れず取り入れ、学校・地域・未来を動的に「つなげる」。
- **未来志向 (Will)：** 誰もがウェルビーイング(幸福)を感じ、持続可能な地域社会へ「つながる」。

佐呂間町教育目標

「自ら学び ともに磨き合い 広い心と生きがいを持ち
ふるさとを愛するたくましいサロマ人」の育成。

2 主要施策の柱

(1) 学校教育の推進： 学びの構造改革と新技術の融合

- **小中一貫教育の実質化：** 9年間の連続性を担保するカリキュラムの定着と、中1ギャップの解消。
- **「サロマ型指導主事」の配置：** 教諭と教育委員会指導主事を兼務する新たなポストを設け、現場の声を即座に施策へ反映。
- **ICT・生成AIの活用：** 新たに「生成AI利活用ガイドライン」を策定し、情報モラル教育とセットで自ら思考を拡張させる力を育成。

(2) 社会教育の展開： 「多彩」な個性が輝く地域づくり

- **「第9次佐呂間町社会教育中期計画」の始動：** 学校・家庭・地域が一体となった教育体制を再構築。
- **「サポーターバンク(地域人材バンク)」の運用：** 地域おこし協力隊を活用したコーディネーターを募集し、農業・漁業などの多彩な人材を教育活動に結びつける。
- **ふるさと教育「サロマ学」の充実：** 多様な大人との交流を通じ、子供たちの職業観を広げ、郷土愛を育む。

(3) スポーツ・文化の振興： 地域全体が「躍動」する活動

- **部活動の地域展開：** 佐呂間町の実情に即した受け皿の整備、指導者の確保、送迎支援などの具体的な仕組みづくりを加速。
- **生涯学習の推進：** 子供から高齢者までがスポーツや文化活動を通じて生きがいを実感できる環境を整備。

3 今年度の重点キーワード

- (1) 「つなぐ」： 9年間の学びと、0歳から18歳までの切れ目のない支援。
- (2) 「多彩」： 地域の人材や技術を掘り起こし、多様な個性を認める社会の構築。
- (3) 「躍動」： 社会環境の変化に負けず、毎日を生き生きと楽しく過ごせる活動の展開。

4 佐呂間小中一貫教育

I 佐呂間町小中一貫教育基本方針

1 はじめに

(1) 小中一貫教育をめぐる動向

今日、子どもたちを取り巻く環境は、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新などにより、社会構造や雇用環境が大きく急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、核家族や少子化の進行、家庭・地域の教育力の低下なども、依然として大きな課題となっている。

平成 27 年の学校教育法の改正により、小中一貫教育を実施することを目的とする義務教育学校の制度が創設され、小学校教育と中学校教育で育まれる子どもの資質・能力を意識的につなげていくことが一層求められた。

さらに、現行の幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領において、「学校段階等間の接続」が新たに示され、子どもが将来、社会で生きてはたらく資質・能力を学校教育などで確実に身に付けるために、校種間の連続性を意識した教育活動を行うことが一層求められている。

(2) 佐呂間町の小中一貫教育の取組

本町では、全国よりも速いペースで児童数が減少している。2013 年度に 256 人であった児童生徒数は、2023 年度には 177 人と、この 10 年間で約 30.9%減少している。これは、全国平均の 9.4%よりはるかに高い減少率である。また、同時に、本町においては、全国学力学習状況等調査結果などから、子どもたちの学力の向上に関して依然大きな課題が見られる。

従って、このような状況に即応した教育環境の整備と学びの連続性・一貫性の確立を基軸とした教育全体の質的な向上が喫緊の課題となっている。

こうした諸課題に直面する中で、令和 5 年度佐呂間町教育行政推進方針において、学校段階等間の円滑な接続に関して次の諸点について重要な方向性を打ち出した。

◇ 0 歳から 18 歳までを見通した教育

- ・「保小接続会議」を立ち上げ、保育所と小学校の接続の課題の検討を新たに開始する。
- ・中 1 ギャップの解消などのため、現在の学校を存続しつつ、小中 9 年間連続した教育課程を編成する「併設型小中一貫校」の検討を新たに進める。

そこで、令和 5 年度より小中 9 年間連続した教育課程を編成する「併設型小中一貫校」の検討を始めることとした。

2 佐呂間町の小中一貫教育

(1) 佐呂間町小中一貫教育の目的

佐呂間町立学校は、小中一貫教育を通して子ども、教職員、地域の人々の **Well-Being (ウェルビーイング) の向上**を図ることを目的とします。

取組の指標を Well-Being (以下WB) に関連する**主観的指標**とします。

◆佐呂間町の小中一貫教育とWB

この教育のめざす姿は、「**みんなが幸せに、そして自分らしく成長できる社会**」です。

その中で私たちは、「**子どもをまんやかにしながら、学校・家庭・地域が循環的につながり合う**」関係性を築くことを大切にします。

◆ Well-being (ウェルビーイング) とは？

「**心も体も元気で、安心して、自分らしく生きられること**」を表す言葉です。

英語の「Well=よい」+「being=存在していること」が合わさっていて、

個人や社会のよりよい状態を意味します。

たとえばこんな状態が、Well-being です：

子どもたちが、毎日楽しく学校に通い、自分の成長を感じられること

教職員が、やりがいを感じながら、安心して働けること

地域の人たちが、子どもたちとつながりを感じ、町に誇りをもてること

佐呂間町の小中一貫教育は、町内小中学校が目指す子ども像を共有し、

9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育

を目指します。

義務教育9年間を連続した学びを確保することで、

学習内容や学習活動の質的・量的な変化への対応を図り、教育の質を向上

させます。

取組の指標として、以下のWB関連指標を活用します。

【児童生徒対象】(年2回アンケート実施)

- ① 自己肯定感:「自分には良いところがある」(全国学力調査項目)
- ② 学習意欲:「授業で自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」
- ③ 協働性:「友達と意見を交わすことで、自分の考えを深めることができる」
- ④ 挑戦意欲:「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している」
- ⑤ 幸福実感:「学校生活が楽しく、充実している」

【教職員対象】(年2回実施)

- ① 働きがい:「子どもの成長を実感できている」
- ② 心理的安全性:「職場で自分の意見を安心して言える」
- ③ 業務負担感:「業務量は適切である」

【保護者・地域対象】(年1回実施)

- ① 信頼感:「学校は子どもの成長を支えている」
- ② 参画実感:「学校運営に参加する機会がある」

(2) 佐呂間町小中一貫教育の5つの視点

視点1 目標をつなぐ

閉校した浜佐呂間小の伝統を引き継ぎつつ、佐呂間小・若佐小・佐呂間中の児童・生徒の状況を共通理解し、保護者・地域と共に「目指す子ども像」を設定し、小中一貫教育、各校のグランドデザイン（学校経営方針）を作成する。

視点2 学びをつなぐ

9年間を通じた教育課程の編成や、学年・発達段階に応じた指導方法の工夫改善を行い、学びにおいて学習指導要領に示された資質・能力の育成、「目指す子ども像」の達成を目指す。また、9年間を通じた「学習規律」「家庭学習」などを設定し、主体的に学ぶ学習習慣を育む。

視点3 子どもたちの心をつなぐ

異学年交流（小中交流を含む）や小学校間で連携した教育活動を通して小中学校間で多様な交流の機会を設けることにより、子どもたちが安心して学べる環境を設定する。

視点4 教職員をつなぐ

9年間を見通した指導方法や行事の改善に向けて定期的に協議の場を設定し、教職員間の連携・協働を図る。

視点5 学校と家庭・地域をつなぐ

P T A組織、学校運営協議会、地域ボランティアなどを積極的に活用し、地域とともにある学校づくりを目指し、家庭・地域との連携を一層推進する。

(3) 佐呂間町小中一貫教育4つの取組

取組1 学びの連続性の保証

- ① 義務教育9年間をつなげるカリキュラムの編成と系統性のある教科指導
- ② 算数・数学、外国語活動・外国語を重点教科とした中学校から小学校への乗り入れによる巡回指導

取組2 子どもが切磋琢磨できる学習環境の創造

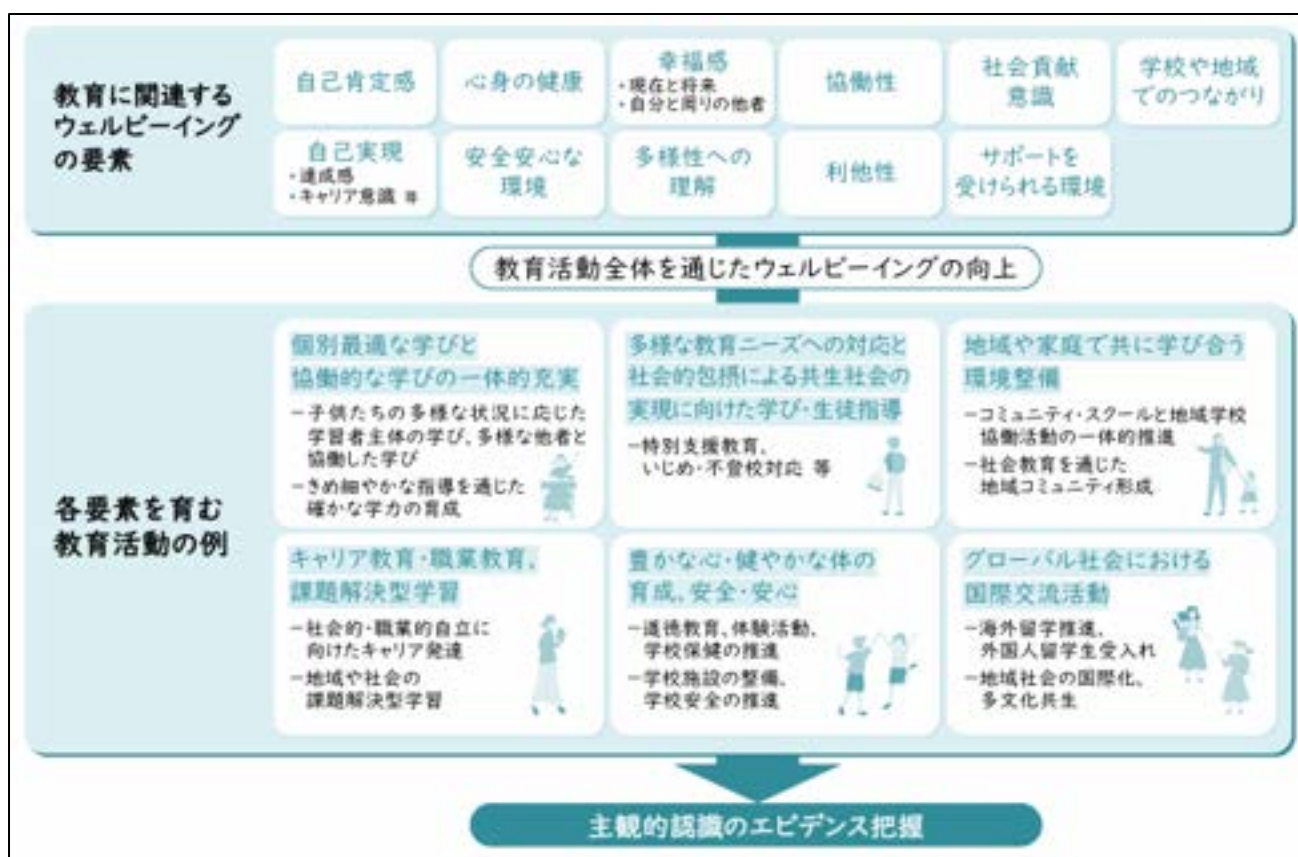
- ① 2つの小学校における合同での教育活動（授業・行事など）
- ② タブレット端末・電子黒板などのICTを活用した合同学習

取組3 豊かな人間性と感性を育む教育の推進

- ① 異学年による教育活動（授業・行事・清掃活動など）
- ② いじめ・不登校・中1ギャップなどの未然防止のためのカウンセラーなどによる相談・支援体制の充実と小中学校の連携
- ③ 特別支援教育連携協議会を中心とした保・小・中・高の連携
- ④ 佐呂間小学校に通級指導教室担当教員を配置した巡回型通級指導教室による子どもの発達のサポート

取組4 ふるさと教育の推進

- ① 生活科（小1・2年）、総合的な学習の時間（小3年～中3年）における佐呂間の産業・自然・文化などの「ふるさと佐呂間町」の学習
- ② 地域の人材を活用したふるさと教育
- ③ 地域の産業・自然・文化の体験型授業



第4期教育振興基本計画

「育てたいさろまっ子の姿」 × ウェルビーイングの要素

- 思いを伝え合い 豊かな未来を創る子
→ 幸福感・協働性・社会貢献意識
- 認め合い 励まし合える子
→ 自己肯定感・利他性・多様性への理解
- 健康な体を持ち やり遂げられる子

「4つの取組」 × ウェルビーイングの要素を含む教育活動

- (1) 学びの連続性の保証
→ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実
- (2) 子どもが切磋琢磨できる学習環境の創造
→ キャリア教育・職業教育、課題解決型学習
- (3) 豊かな人間性と感性を育む教育の推進
→ 豊かな心・健やかな体の育成、安全・安心
- (4) ふるさと教育の推進

(5)佐呂間町小中一貫教育の目標

佐呂間町教育目標

自ら学び ともに磨き合い 広い心と 生きがいをもち ふるさとを愛する たくましいサロマ人
 ~自ら未来を切り拓き、たくましく生きるために~

育てたいさろまっ子の姿 (佐呂間町小中一貫教育 (学校) の目標)

思いを伝え合い
豊かな未来を創る子

進んで学ぶ生徒

認め合い 励まし合える子

思いやりのある生徒

健康な心と体をもち
やり遂げられる子

たくましい生徒

みんなが幸せに、そして自分らしく成長できる学校を目指して

資質・能力		育てたいさろまっ子の姿		
		思いを伝え合い 豊かな未来を創る子	認め合い 励まし合える子	健康な心と体をもち やり遂げられる子
知識・技能 <small>何を理解しているか 何ができるか</small>	中	語彙力や表現力を高め、自分の 考えや思いを伝えられる 聞く、話す、核の基本を 身に付けている	互いの良さや違いに気づ き認め合える 社会性を身に付ける	生活を整え、計画的に 行動できる 基本的な生活習慣の定着 メディアリテラシーの習得
	小	自分の考えや思いを伝え られる	友だちのよさを認め合 うことができる	早寝・早起き・朝ごはん の習慣を身につけている
思考力・判断 力・表現力等 <small>理解していること、で きることをどう使うか</small>	中	対話で考えを深められる 自分の考えを伝えあう	思いやりのある温かい 人間関係を築く みんなのために自ら動く	自分の心と体を理解し、 前向きに考えられる 自ら考え行動を起こす
	小	お互いの考えや思いを 伝え合える	相手の立場で考え、助け 合うことができる	自分のことを自分ででき る
学びに向かう 力、人間性等 <small>どのように社会・世界 とつながり、より良い 人生を送るか</small>	中	主体的に考え、創造的に 行動できる 学んだことを生かして問 題を解決する	仲間と協働し、学び合え る 違いを理解し尊重する	目標に向かって粘り強く 挑戦し続けられる 何事も諦めずにやりと げる
	小	友だちと協働し、問題を 解決できる	互いのよさを認め合い、 協力し合える	目標に向かって見通しを 持って行動できる
Well-being の要素		幸福感 協働性 社会貢献意識	自己肯定感 利他性 多様性への理解	心身の健康 自己実現

令和8年度 佐呂間町小中一貫教育 (学校) の重点目標

令和8年度 佐呂間町小中一貫教育 (学校) の重点的な取組

令和8年度 各校の取組

(6) 佐呂間町小中一貫教育のロードマップ

令和7年度からスタートした佐呂間町小中一貫教育について、3年ごとの段階に合わせたロードマップを設定する。

今後、少子化等により小学校の統合、閉校も予想されるが、併置型小中一貫校をイメージしながら、みんなが幸せに、そして自分らしく成長できる学校を目指して佐呂間町小中一貫教育のシステムを進化発展させていく。

佐呂間町小中一貫教育ロードマップ

期	年度	取組内容	
導入期	令和7年度 (2025)	佐呂間町小中一貫教育開始 『さろま学』始動 共通研修テーマの設定	浜佐呂間小閉校
	令和8年度 (2026)	重点教育目標・分掌業務・研修テーマの統一 小中共通指導内容(学習規律等)の設定・実施 ICT活用指導力の向上(AI活用含む) 子どもの主体的な小中合同活動の検討	
	令和9年度 (2027)	小中合同行事の実施 導入期3年間の検証と改善策の策定	
改善期	令和10年度 (2028)	小中合同行事の拡充(体育祭・文化祭等の検討) 「さろま学」の高度化(地域課題解決プロジェクトの本格化) 新学習指導要領(小学校)移行期準備	新庁舎完成
	令和11年度 (2029)	新学習指導要領(中学校)移行期準備	
	令和12年度 (2030)	改善期3年間の総括評価 新学習指導要領(小学校)全面実施への対応	新学習指導要領 小学校全面実施
充実期	令和13年度 (2031)	新学習指導要領(中学校)全面実施への対応 9年間の学びの系統性の完全確立 卒業生(高校生)との連携によるキャリア教育の充実	新学習指導要領 中学校全面実施
	令和14年度 (2032)	新学習指導要領(高校)全面実施に伴う高校連携の強化 佐呂間町小中一貫教育モデルの道内への発信 Well-being指標の5年間推移分析と次期計画策定	新学習指導要領 高等学校全面実施
	令和15年度 (2033)	第1期(R7-15)の総括評価 第2期(R16-24)基本構想の策定 持続可能な小中一貫教育システムの確立	

3 令和8年度 重点教育目標

(1) 現状と課題

佐呂間町小中一貫教育推進基本方針の内容と、令和7年度の職員による「グループワーク結果」を比較すると、目指すべき方向性における強い「共通点」と、現状を打破するために乗り越えるべき課題としての「差異（強調点の違い）」が見られた。以下に、それぞれの視点から整理する。

① 共通点：目指すべき教育の方向性

基本方針が掲げる目標と、職員の先生方が必要だと感じている改善点は、以下の4点で強く合致しています。

ア WB（Well-being）の追求

基本方針：

「みんなが幸せに、そして自分らしく成長できる学校」を目指し、ウェルビーイングの向上を目的としています。

職員の声：

自己肯定感の向上や、未来のウェルビーイングにつながる力の育成が重要であると言及しています。

イ 主体性・自己決定への転換

基本方針：

「主体的に考え、創造的に行動できる」姿や「やり遂げられる子」を目指しています。

職員の声：

「指示待ち」や「受け身」の現状を打破し、「やりたい学習」や「自ら動くことができる主体性」が必要であると強調しています。

ウ 人間関係・協働の重視

基本方針：

「認め合い 励まし合える子」や「仲間と協働し、学び合える」姿を掲げています。

職員の声：

子どもたちの「素直さ」や「仲の良さ」という既存のよさを活かしつつ、さらに対話を通じて考えを深めたり、高め合ったりする関係性を求めています。

エ 生活習慣の改善

基本方針：

小学校の目標として「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣化を明記しています。

職員の声：

スマホ・ゲームによる睡眠不足や生活習慣の乱れを深刻な課題として捉えています。

② 差異・ギャップ：現状の捉え方と理想へのハードル

基本方針が描く理想像に対し、職員の先生方はより具体的な現実的な障壁を強調しています。

ア 学習意欲と基礎学力の乖離

基本方針：

「系統的な教育」により「教育の質を向上」させるとしています。

職員の声：

目標以前の段階として、「学習に対する熱量が感じられない」「学力が低い」「学習の必要性

を感じていない」といった、学びに対する「根本的な体力のなさ」への懸念を強く示しています。

イ 表現力における「必要性」の欠如

基本方針：

「語彙力や表現力を高め、自分の考えや思いを伝えられる」姿を目指しています。

職員の声：

「話さなくても気づいてくれる」「言わなくても誰かがやってくれる」環境の中で子どもたちが「わざわざ言葉で伝える必要性」を感じておらず、それが表現力の向上を妨げているという鋭い指摘があります。

ウ 「素直さ」の捉え方

基本方針：

肯定的な資質として背景に置いています。

職員の声：

「素直で穏やか」という長所がある反面、それが「ガツガツしていない」「向上心が低い」「流されやすい」という、主体性の欠如や粘り強さの弱さにもつながっているという、表裏一体の課題として捉えています。

エ 未来への展望

基本方針：

「豊かな未来を創る子」を目標としています。

職員の声：

現実には「将来について具体的に考えていない」「町の閉鎖的な部分が写り、新しいことや変化を嫌う傾向にある」といった、子どもたちの視野の狭さを課題視しています。

小中一貫教育基本方針が示すビジョンに対し、職員は「いかにして子どもたちの中に、学びや表現に対する『切実な必要感』や『自ら燃える熱量』を育てるか」という点に、より強い危機感と重点を置いていることがわかります。このギャップを埋めることが、令和8年度に向けた具体的な施策（「Try&Error」の実践や「あうんを越えた言葉」など）の焦点になる。

■ 「Try&Error」の実践 3つの柱

① 授業における「失敗OK文化」の醸成

- ・ 教師が「間違いは学びのチャンス」と明示的に価値づける
- ・ 発言や発表時に「ナイストライ!」「そこから考えよう」等の肯定的フィードバックを徹底
- ・ 正解だけでなく、思考過程を評価する

② 振り返りの習慣化

- ・ 毎時間の授業終了時に「今日の挑戦」「うまくいったこと」「次に試したいこと」を記録
- ・ 失敗体験を「次の一手」につなげる思考習慣を育成

③ 挑戦を可視化・共有する仕組み

- ・ 学年掲示板に「今週の挑戦者」コーナーを設置
- ・ 学校だよりで児童生徒の「しなやかな挑戦」エピソードを紹介
- ・ 保護者会で「失敗から学んだこと」を共有し、家庭との連携を図る

(2) 令和8年度 重点教育目標

小学1年生から中学3年生までの9年間を見据え、発達段階に応じた成長のグラデーションを描きつつ、全校種で共有できる「佐呂間町小中一貫教育 令和8年度 重点教育目標」を設定する。

小1から中3まで、共通の「言葉」で語りかけられる、一貫性のある目標とした。

令和8年度 佐呂間町小中一貫教育 重点教育目標（案）

**「自ら問い、言葉でつながり、しなやかに挑み続ける」
～ 心の中に「やってみたい！ やってみよう！」の火を灯そう ～**

この目標は、佐呂間町の児童生徒の良さである「素直さ」や「仲の良さ」を土台にしつつ、課題である「指示待ち・受け身の姿勢」や「表現力の弱さ」を克服し、自律した学習者へと導くことを意図しています。

■「育てたいさろまっ子の姿」との関連性

重点教育目標の3つの要素は、小中一貫教育の3つの柱（さろまっ子の姿）と以下のように深く結びついています。

① 「自ら問い」 × 【思いを伝え合い 豊かな未来を創る子】 = 幸福感、協働性

現状の「指示待ち」から脱却し、自律的に学ぶ「自走」の状態を目指します。

依存的な学習から、自ら課題を見つけ「どうして？」と問いを立てる探究的な姿勢を養うことで、自らの意志で未来を切り拓く力を育てます。

② 「言葉でつながり」 × 【認め合い 励まし合える子】 = 利他性、多様性の理解

「話さなくても気づいてくれる」「言わなくても誰かがやってくれる」環境の中での「あうんの呼吸（言わなくてもわかる）」に頼りすぎる現状を打破します。

仲が良いからこそ、あえて自分の考えを「言葉」にして伝え合い、異なる意見を認め合いながら納得解を生み出すコミュニケーション力を養います。

③ 「しなやかに挑み続ける」 × 【健康な心と体をもち やり遂げられる子】 = 自己実現

失敗を恐れる傾向や現状維持の姿勢を改善し、粘り強さ（レジリエンス）を育てます。

「Try&Error」を文化とし、失敗を学びのプロセスとして面白がり、目標に向かって何度でも挑戦し、やり遂げる強い心と体を育みます。

■目標達成に向けた「3つの変革」

この目標を通じて、9年間で子供たちの資質・能力を次のように変革させていきます。

① 学びの変革（依存から自走へ）：

小1から「自分はどうしたいか」を問い続ける習慣を作り、中3までに自律した学習者を育てます。

② 関係の変革（あうんから対話へ）：

仲間の良さを大切にしつつ、それを超えて社会で通用する論理的な対話力を磨きます。

③ 心の変革（満足から挑戦へ）：

困難に直面しても折れずに、何度でもやり直す「しなやかな強さ」を保障します。

■教職員の役割 ～「教える」から「引き出す」へ～

この目標を達成するため、教職員も“『教えすぎ』を手放し、子供の『問い』と『挑戦』に伴走する”を共通認識として、子供の言葉を「待つ」、前向きな失敗を「受容する」、子供同士を「つなぐ」という行動指針を共有します。

行動指針 (Action Principles)

- ① 「待つ」：子供が自分の言葉を探している間、「沈黙の5秒間」を大切にし、沈黙を恐れず待つ。
- ② 「受容する」：子供の突拍子もない問いや、前向きな失敗を「いいね！」と受容する。
- ③ 「つなぐ」：先生と生徒の1対1ではなく、子供同士の言葉がつながるような「問い」を投げかける。

■9年間の成長イメージ（発達段階別の重点）

同じ目標を掲げながら、学年に応じて指導のアクセントを変えていきます。

区分	段階的なねらい	具体的な子供の姿
低学年 (小1-4)	「やってみたい」の育成	「どうして？」と進んで質問し、自分の気持ちを素直な言葉で友達に伝える。
中学年 (小5-中1)	「自分たちで」の経験	仲間の意見を聞いて考えを深め、失敗しても「次はこうしよう」と切り替える。
高学年 (中2-3)	「社会を拓く」力の確立	『あうん』に頼らず論理的に議論し、地域の課題や自分の将来に向けて自律的に行動する。

4 令和8年度 重点的な取組（3校共通）

令和8年度の佐呂間町小中一貫教育を具現化するため、「経営活動」と「教育活動」の2つの視点から具体的な取組を重点的に行う。

■経営活動の視点：自走する組織とWBの基盤づくり

経営活動では、3校が「一つの学校」として機能するための組織改編と、教職員が主体的に動ける環境整備を重点的に行います。

① 校務分掌の統一と4部体制の運用：

3校の経営計画を一本化し、「教務・研修・指導・事務」の4つの部に再構成することで、学校間の連携を効率化し、教職員全員が当事者意識を持って参画する体制を整え、機能させます。

② 教職員のウェルビーイング向上（働きがいと働きやすさの両立）：

心理的安全性を土台とし、管理職が権限を委譲する「任せて協働するマネジメント」を推進することで全職員がゴールを共有し、主体性を発揮して、機動的に自走する組織の構築を目指します。

■ 「任せて協働するマネジメント」の実践

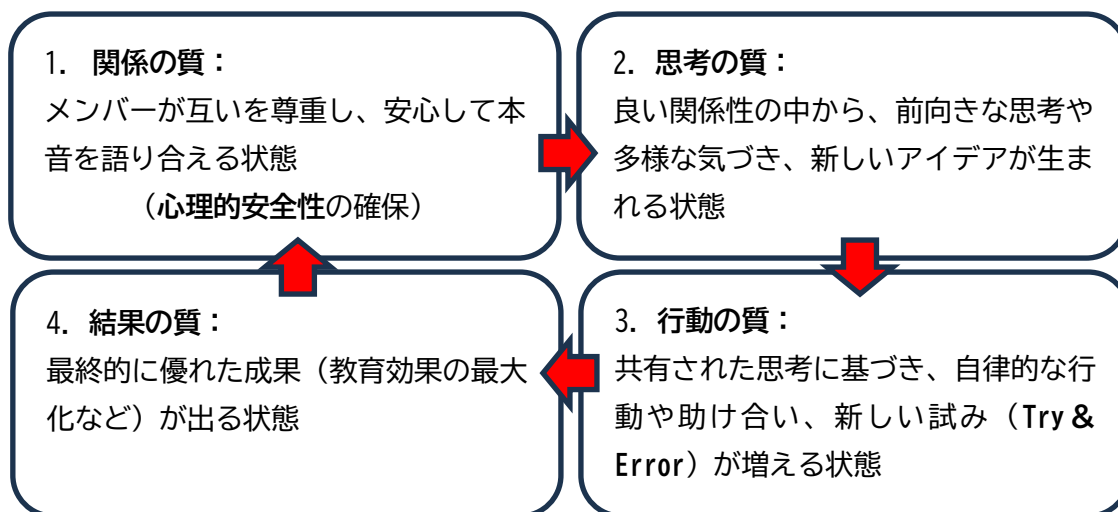
- ① 主任への権限委譲
 - ・各部(教務・研修・指導・事務)の年間計画立案権限を委譲
 - ・管理職は「方向性の提示」「何を任せるか・誰に任せるかの明確化」し、「支援・調整」に専念
- ② チーム単位での自律的運営
 - ・学年団・教科部会に「課題設定→実践→評価→改善」のPDCAサイクルを任せる
 - ・月1回の「主任会議」で進捗共有と調整を行う
- ③ 対話と承認の仕組み
 - ・月1回の「1on1 ミーティング」で個々の教職員の思いや困りごとを傾聴する
 - ・主任会議、担当者会議、部会を「情報伝達の間」から「対話と意思決定の間」へ転換する
- ④ 失敗を許容する文化
 - ・「挑戦から生まれた失敗」は減点対象としない
 - ・年度末の振り返りで「次年度の挑戦」を共有し、次年度に活かす

③ 校務DXによる業務効率化:

電子データの管理ルール統一や共通フォームの整備を進め、事務負担を軽減することで、教師が子どもと向き合う時間や教材研究の時間を十分に確保します。

④ 「成功の循環モデル」の回旋:

良好な「関係の質」からスタートし、対話を通じて「思考の質」を高め、自律的な「行動の質」へとつなげることで、組織全体で教育効果（結果の質）を最大化させます。



成果が出ることで、再び「関係の質」が向上する

⑤ 保護者・地域との連携:

ア 情報共有の徹底

(ア) ガイドラインの配布と説明会

- ・全保護者に本ガイドライン(簡易版)を配布

- ・4月のPTA総会で管理職が重点教育目標を説明
- ・学校運営協議会で年3回進捗報告
- (イ) 可視化と発信
 - ・学校だより・HP・SNSで「今月の重点」と実践事例を発信
 - ・各教室に「令和8年度 重点教育目標」ポスター掲示
 - ・保護者面談時に個別の成長を「3つの柱」で共有
- イ 協働の仕組み
 - (ア) 「さろま学」への参画
 - ・地域人材バンクの整備(職業講話、体験活動の講師)
 - ・地域協働プロジェクトの企画・実施
 - (イ) 家庭との連携
 - ・「家庭で育むWB」リーフレット配布
 - ・スマホ・ゲーム利用に関する共通ルールづくり(児童生徒会・PTA協働)
 - (ウ) 学校運営協議会の活性化
 - ・委員に「WBの向上」の視点から学校評価を依頼
 - ・地域の教育資源活用に関する提案・調整

■ 教育活動の視点：9年間の学びの連続性と主体的成長

教育活動では、重点教育目標「自ら問い、言葉でつながり、しなやかに挑み続ける」の達成に向け、9年間を見通した指導を展開します。

① 「学びの自走」を支える教育課程の編成(教務・学習)

子供たちが「自律的な学習者」として成長できるよう、9年間の学びを系統的にデザインします。

ア 「さろま学」の深化と系統化：

小学校での地域資源を活用した「地域の魅力発見」から、中学校での「地域の課題解決」に向けた探究活動へとつなげ、主体的に社会に関わる意欲を育てます。

イ 学習習慣の確立と統一する取組：

3校間で学習用具、ドリル、評価基準(カッティングポイント)を共通化し、小中接続をスムーズにすることで、基礎学力の定着と安心感を醸成します。

ウ 「やりたい教育」への転換：

従来の「やらなければならない」教育から、子供の興味関心に基づき、学習意欲を引き出す授業づくり、自律的に家庭学習や自主学習を選択できる仕組みへとシフトします。

② 「言葉でつながる」深い学びを実現する授業改善の推進(研修・ICT・図書)

自分の言葉で思いや考えを、論理的に伝え合う力を育てます。

ア 「書くこと」と「対話」を軸とした授業改善：

全教科において思考を可視化しながら、言葉で伝え合う活動を日常化させることで、思いや考えを伝え合える論理的な対話力と「深い学び」を実現します。

イ 教職員が学び合える環境づくり：

3校で共通の研修テーマのもと授業改善を進め、教育実践研究会において全教職員で学ぶ場を

設定する。

また、日常的に 3 校及びさろま保育所、佐呂間高校との相互授業参観を行う。各校の研究授業、特設授業（学校教育指導）に積極的に参加し、3 校間の教職員間の学び合いを推進する。

ウ ICT の効果的な利活用：

ロイロノートを用いた意見共有や、スクール AI や AI (Gemini 等) の効果的な活用など、発達段階に応じた操作目安に基づき、児童生徒が自立して端末を使いこなす環境と学びを広げる場を整えます。

エ ウェルビーイング指標による評価：

全国学力・学習状況調査等の結果分析に加え、テストの点数以外に、「自分でできた（自己決定）」「仲間と高め合えた（協働性、つながり）」といった非認知能力（子どもの実感値）で振り返りを行う仕組みを整備します。

③ 「こどもまんなか」の視点に立った支援と交流（指導）

子供たちが主体的に関わり、失敗を恐れずに挑戦できる環境を構築します。

ア 「事後対応」から「未然防止」への転換：

いじめ防止基本方針や不登校児童生徒対応システムを統一し、問題が発生する前の集団づくりや未然防止に視点を移します。

イ 子供自身による「きまりづくり」：

「こどもまんなか」の視点から、学校のきまりや取組を児童生徒自身が振り返り、修正に関わる仕組みを構築します。学級活動、児童会・生徒会活動において自分たちで創出・修正していく場を設定し、「やってみよう」を実現する活動を生み出します。

ウ 交流を通じた「憧れ」と「安心」：

中学校教員の乗り入れ授業や異学年交流等を通じて中 1 ギャップを解消し、進級することへの安心感と上級生への憧れを醸成します。

今後に向け児童生徒が共に参加し、関わり合いながらともに成長できる小中合同の活動等の検討を行います。

④ 自走する教職員組織の構築（事務・経営）

子供の「自走」を支えるためには、まず教職員自身がウェルビーイングを実感し、主体的に動ける組織である必要があります。

ア 校務 DX と業務の効率化：

共通フォームの整備や電子データの管理ルールを統一し、事務負担を軽減することで、教師が子供と向き合い、教材研究に没頭できる時間を確保します。

イ 「教えすぎ」を手放す伴走者への転換：

教職員は「教える人」から、子供の問いを「待つ」、失敗を「受容する」、子供同士を「つなぐ」ファシリテーターとしての役割を共有します。

ウ 心理的安全性の確保：

失敗したときに個人を責めるのではなく「組織的な学び」として捉える「TRy&Error 教育」を、子供だけでなく教職員組織の中でも実践します。

5 令和8年度 佐呂間小学校の重点的な取組

1. 令和8年度 重点的な取組

- (1) 自己肯定感の向上(全学年で自分発見アンケート3.00以上)
- (2) 基礎学力の定着の徹底(到達度60%以下児童0%の完全達成)
 - + 読書活動の推進と読書習慣の定着
- (3) 表現力・発信力の育成の強化
 - + ICT活用の質的向上(ツールの活用から思考力育成へ)
- (4) 保護者・地域との協働体制の強化
 - + 生活習慣の改善(デジタルデバイス使用時間削減、朝食摂取率90%)
- (5) 小中一貫教育の実質化と9年間カリキュラムの完成

2. 学年別重点課題

- 1・2年生: 基礎学力と生活習慣の確実な定着、読書習慣の形成
- 3・4年生: 自己肯定感の維持・向上、思考力・表現力の育成
- 5年生: 高学年としての自覚と責任感の醸成、学習習慣の質的向上
- 6年生: 自尊感情の向上、中学校接続を見据えた学力・体力の強化、リーダーシップの発揮

3. 組織体制の改善

(1) 情報共有の改革

- 決定事項の速やかな全職員共有(C4th活用)
- 原則「2か月前提案」「実施1週間前確認」情報発信のデッドライン設定
- 職員朝会週1回への削減試行(R8年度前期)

(2) 分掌会議・分掌業務の効率化

- 部会活動の全体共有と相乗効果の創出
- 「校内ロードマップ」による進捗の可視化
- 会議時間の短縮と負担軽減
- AIの効果的な活用

(3) 相談体制の構築

- メンター制度の導入(若手教員支援)
- 定期的な1 on 1 ミーティングの設定
- 管理職との気軽な対話機会の創出

4. 保護者・地域連携の強化

(1) 信頼回復のための取組

- アンケート結果の迅速公表と回答文書作成
- 個別相談への丁寧な対応と経過報告の徹底
- 児童観察の強化と問題の早期発見・組織的対応

(2) 開かれた学校づくり

- 学校だより・HPでの情報発信充実
- 授業公開・学級懇談会の充実
- PTA・学校運営協議会での意見交換活性化

5. 小中一貫教育の進化**(1) 目的を共有し、1つの学校として機能化する**

- 3校共通の重点教育目標、重点的な取組の設定
- 分掌組織の統一
- 研修テーマの統一

(2) カリキュラムの修正・改善

- さろま学(総合的な学習)の検証・改善サイクル確立
- 9年間を見通した系統的カリキュラムの精緻化
- 単元配列表の実質的活用と教科横断的授業の推進

(3) 小中交流の実質化

- 交流の目的・ねらいの明確化(「何のための交流か」)
- 授業公開週間での具体的成果指標の設定
- 教職員間の積極的な交流と実践事例の共有

(4) 架け橋プログラムの深化

- 保小連携のさらなる充実
- スタートカリキュラムの質的向上と全校への波及効果

6. 働き方改革と教職員Well-beingの向上**(1) 超過勤務0%への挑戦**

- 業務の徹底的な見直しと削減
- ICT化による業務効率化の推進
- 学校行事の精選と準備時間の短縮

(2) Well-being向上策

- 「元気な学校は元気な教職員から」の実現
- ワークライフバランスの推進
- 教職員が授業に集中できる環境づくり

(3) 応援文化の醸成(互いに応援し合える人間関係づくり)

- 「困ったときはお互い様」の学校文化
- トライ&エラーを許容する組織風土
- 対話と協働による学校改善